

順正寺報 第四号

'91.7.5

ウラボン 法要 御案内

死は娑婆しやばの常とは知りながら、自身に直面さ

れた時、愛別離苦の悲しみ、更に「誰モ代ル者  
ナキ一人」の痛み、苦悩を体感なされ、一声の  
称名念佛へと御心向けの御事と拝し上げます。

さて、当山・順正寺では、下記の通り、送り  
盆の十六日夜、盂蘭盆（ウラボン）総経供養の  
一座をお勤め申し上げます。

叫喚きょうわん・焦熱しょうねつにも似た日暮らしのさなか、浄土  
の清風に触れ、ひとときを御先祖の徳と仏恩の  
深きことに思いをいたされる様念じつつ御案内  
申し上げます。

住職

記

日時・七月十六日（火）

午後七時ヨリ

会処・順正寺本堂

※法話 一席

総経供養 一座

以上

# がんばらないかなあ。

江口 晋貝松

現在、私は大学で哲学を専攻しています。教職課程をとっており、ちょうど今、教育実習を京都の母校で行っている最中です。教室に入ると生徒達がバタバタと自分達の席に戻り、「起立、礼、黙想。」と、会長が号令を掛けて、みんな席に座り黙想を始めます。席に着いても、ソワソワとして目をちらちらと開けたり、教科書やノートをまだガチャガチャと机の中から出していたりと、みんな落ち着きがありません。それでも、少し静かになると、「黙想やめ。」と、声を掛けて、授業を始めるといった感じでした。

こうして、わずか三年ばかり経って、かつて通った高校に戻ってきたわけですが、生徒達と接してみてもず思ったことは、《パワーがあるなあ》ということですね。彼らとは三つ四つ、年が離れているだけにすぎないのに、その彼らから発せられる熱気は、教壇に立っている私を圧倒してしまいます。私も負けまいと、力を入れて声を張り上げ、汗をふつつと体中から出して、一時間の授業の間、緊張感を持って話をし、また、板書をおこなって授業をするのですが、授業が終わっ

て控え室に帰ると、ドッと疲れを感じてしまいます。全く彼らの持つ若い力、エネルギーの凄さには驚かされます。実際、彼らのその体中から漲みなぎってくる力強さ、精神的エネルギーの波動を受けとってみると、人間は肉体的な物質的な活動だけでなしに、様々な出会いを通じて、感情や理性を動かして自分自身を造り上げていく「精神的な活動」も行っているんだな、と、再認識させられました。

普段、何気なく喋ったり、色々な行動を我々はとったりしていますが、そこには、絶えず自分の意思や考え、気持ちたちが反映されており、目には見えない精神的なエネルギーを発散させているのだと、私は思います。そして、様々な影響を受け、また与えているのです。

このような人間の心の交流、精神的な活動は、感受性を豊かにし、感性を磨き、自分の周りの世界を豊かにするものだと思います。何かこう、精神的な交流の中に自分の心を照らす、あるいは、育てるものがあり、それによって成長し、自分というものを持つに至るようになる。自分を持つというのは、自分の中にある光を発し、自分自身が輝くことに他なりません。その光は希望であり、感動であり、また、願いとといった自分が生きるうえでの原動力となるものです。その光が自

分自身を明るくし、また、周りを照らすのだと思うのです。

それぞれが、それぞれの光を持ち、自分を明るくし、周りを照らす、こういった世界が人間の朗らかな喜びのある豊かな社会を形作っていくのではないのでしょうか。

しかし、人間というのは、何時も心が平穩無事で安らかな気持ちでいられるといった存在ではないようです。妬み、疑い、迷い、憎悪といった様々なくらい陰が、その光を遮るのです。そして不安になり、自分から離れて他のものに依存しようとしています。自分が生きていく意味、力は自分自身の中に、心のそこに秘めている輝きにあるのに、その意味を、目的をほかのものに求めようとし、さまよい歩くのです。この暗い陰をさす心の曇りを晴らすためには、自分に対して前向きな姿勢でのぞみ、常に自己を反省し、ひたむきな気持ちで物事を処して、その曇りをすこしづつ払っていくほかないように思われます。

ストレートで素直な生徒達の輝きに照らされ、

「自分も頑張らないかなあ。」と、思う今日です。

六月、教育実習期間中

京都、母校に戻って

## 時 間

暗闇を一人で歩く  
もくもくと歩み続ける

人がいる  
一人いる

二人、三人、四人、五人・・・

ふと気付くと周りじゅう人がいる  
前に後ろに、右を見ても左を見ても

視界を越えて人がいる

皆、歩いている

泣きながら、笑いながら、怒りながら

皆、歩いている

疲れた

その場に腰を下ろす

皆、腰を下ろす

泣いている、笑っている、怒っている

また歩いてみよう

いつの間にか一人になっている

そして、気付くと周りに人が

共に歩いている。歩いている・・・

俺も人間なんだなあ。

(釋 智 流)

故郷に帰りて・・・

◎南天の松のお山にましまする

先祖みぢたずねて、今日は来ませり

◎離れても想うところはみなみなり

わがふるさとのきびばたけのむら

◎ただただに無為に過ごせし五十年

頭を垂れて墓前にぬかづく

順正寺世話人 平山 昌彦

### 「白色白光の△△」御案内

七月の「白色白光の会」は、左記の

通りに執り行ないます。

記

◎日時・七月二十日（土）午後一時ヨリ

◎会処・順正寺本堂

新規会員も随時募集しております。

詳しくは当寺までお問い合わせ下さい。

京都の祖母が亡くなる前、最後に会ったとき

「ええか、人間、悪い人は一人もおらん。みーんな、善い人や。それだけは覚えといてな。」と、話してくれた。今迄は、その言葉を、『彌陀の救い』だの、それが『最終的立脚地なのか』だの、変に理屈をこじつけようとしていた。それは違うような気がする。いや、絶対違う。そのとき祖母は自分の手を握り、じっと見つめてくれていた。それは、祖母が自分に切に掛けた願いである。素直に生きて、素直に人と接し、楽しく暮らしてほしいという。今はそう思える。そして、たとえ綺麗事だと言われようが、そう有りたいと思う。

我が従弟・貫裕師は、今回の原稿を書くのに正直言って大変な辛い思いをしたようです。と言うのも、教育実習中というのはただでさえする事が多く（その日あったことを毎日思い起こし、感想文・反省文として提出する事が義務付けられたり、もちろん翌日の予習、等々）そのため、平均睡眠時間はナポレオン：約三時間。それなのに、それなのに、彼は、生真面目、約束したのだからと送稿してきてくれました。感謝！  
平山氏は、素直な想いを詩に乗せ、そして、自分自身を新たに見詰め直す日々の大切さを教えてくれました。それは、貫裕も同じです。欲深な私。まだ物足りない。もっと色々知りたい。投稿、待ってます。合掌

☎1777 東京都練馬区石神井町三の十七の四  
03 (3996) 2064

順正寺